

空



2007年

**SORA** 17号

晴  
夜

(17)

— 3

柴  
田  
佐  
知  
子

黄  
塵  
や  
撥<sup>ば</sup>  
条<sup>ね</sup>  
よ  
り  
成  
れ  
る  
鼠  
捕  
り

若  
布  
ち  
ぎ  
り  
て  
玄  
海  
の  
荒  
れ  
に  
け  
り

初蝶や音なく曲がる筑後川

禿頭の血筋に父も春の風

雛流るもとより戻る気などなく

杖をつく母となりたり春の月

龍天に登る彩色古墳より

放蕩も小振りとなりぬ鮎膾

魔  
狩

秋 千晴

ごうごうと湯の沸き立てる大炉かな

鹿狩の首のだらりと運ばるる

団欒のまあるくまるく林檎剥く

日のさして金柑の木のぐいと出る

鮫鱈の皮口中で動き出す

裸木に刺さりたるごと鳥止まる



火祭りの火起こし役は消防団

つの字に曲げ尻に冬日の野良着かな

枯草のやうに強情なる女

クリスマスソングの中に仏具屋も

病室へ枝ごと蜜柑持つて行く

店先を声もはみ出し年の市

古びたる道具箱より屠蘇器かな

屠蘇受くる為に最終便に乗る

容赦なく一本とらるる初稽古

寒  
紅

あさなが捷

返り花問はるる前に答へたる

罌粟の花墳の裾よりそよぎ出す

地獄絵とまがふ古びし涅槃変

田の隅に蝌蚪の遊びて暮れ始む

菜の花や昔かたぎのまま逝きし

如月の乾ききりたる厨かな



暮らすには程よき相手日脚伸ぶ

老ゆること承服できず雪女郎

冬構へ母に力のありし頃

地球にはだあれもない牡蠣の殻

凧や板戸の粗き漁師小屋

寒紅をさして柩の閉ぢられし

凍蝶の矜持つらぬき通したる

戒名の朱色に冬日入りにけり

冬ざれやいくつもの恋秘めしまま

産湯

小林朱夏

寒月と同じ高さに鬼瓦

福耳に小声の届く日向ぼこ

一雨が寒の戻りを強くせり

追儺祭帰りは鬼が支へられ

産湯して春の光も包み込む

麦を踏む怡土富士の裾を少し踏む





御七夜の赤子雛の灯の中に

山笑ふ仏の顔の湯治客

子はとうに飽いてゐるなり土筆摘

ノラとなる日は春泥を気にもせず

湯気上げて鬪牛更に強くなる

闊達な三連水車山笑ふ

ふらここや空に貼り付き又戻る

紫木蓮ほぐれ骨焼く煙かな

鯉幟疲れ果てしが降ろさるる

梟

苑  
実  
耶

浮く柚子のひとつは大き乳房より

冬夕焼病室も人も火の如し

梟や恋に狂ひし夜もあり

死神に酒を勧めし大晦日

一人寝の右肩寒し雪女郎

柁の匂ふ実家や尾を振る犬



うち揃ひ恵方向きをり屋根の鳥

日脚伸ぶ転ばぬ先の杖をつき

左義長やこの地動かぬ人ありし

どんど火や消防団員見守りて

女正月傍らに夫ただ笑ふ

極楽は湯煙の中春きざす

湧き水で洗ふ青菜や春の鴟

職を辞す夫に春の陽あまたなり

焼きたてのパン買ひに行く春の雪